
狙われた名探偵

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狙われた名探偵

【Nコード】

N7017E

【作者名】

千景

【あらすじ】

時効寸前の事件の犯人に遭遇し、見事に捕らえたコナン。しかし、数日後身の回りで不可解な出来事が続くようになり、コナンは…。

プロローグ（前書き）

「名探偵シリーズ」第3部です。「はじまりの名探偵」「壊れかけた名探偵」の設定は生きていますが、この話だけでも、独立して読むことが可能だと思います。

プロローグ

雨が降っていた。

空から降り注がれる大粒の雨。濡れる背が酷く寒い。
近づく複数の足音。

地面に伝い落ちる水が不自然な色に染まり、流れて、消える。
それは一瞬。気付いたら飛んでいた。

何も言えず、何も感じることなく、弾け飛んだ意識。
失われた感覚。

ただ、最後に見たのは、赤い手。己の赤い手だけだった。
遠くで誰かが叫んでいる。

だけど、もう何も聞こえない――
もう何も：見えない。

「コナン!!」

第1話 遭遇

「もう観念したほうがいいんじゃないか？おじさん」

「なっ……！」

男は自分が置かれている状況に戸惑っていた。目の前に立ちはだかる小さな体。まだ、6、7歳くらいの少年だ。しかし、その話の方や、皮肉を浮かべた笑みは大人びていて、子供を相手にしている気がしない。そう、自分は今追いつめられている。こんな年端もいない子供に……追いつめられているのだ。

「俺に会っちゃったのが運のつきだったな」

……何故怯えなければならぬ。相手は子供だというのに。何故。見つかるはずがない。ここは自分しか知らないはずの場所。だから、ここを隠し場所を選んだ。なのに、何故こいつはここにいる。何故、知っているんだ。

「あんたもばかだな。あと1日我慢すれば時効だったのに」

男は驚愕し、その子供を凝視する。

「ま、仕方ないか。このビルは明日取り壊されちまうもんなあ。そんなことになれば、ここに隠してあったモノが発見されちまう。あんたが、この15年間隠し続けてきたモノがね」

「きさま……」

（何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ）

男の頭の中はもうそれしかなかった。

知っている。この子供は俺がここにいる理由も、ここに何があるのかも知っている。

こんなはずではなかった。あと1日、あと1日、このビルが壊されるのが遅かったら、俺は――

一体何だって言うんだ。こんな子供が俺を追いつめ、何のメリツトがあるというんだ。誰なんだ、お前は。一体誰だと言うんだ。

お前は一体……

「何者なんだお前はっ！」

男は叫ぶ。無意識にその場から後退りながら。

その言葉を聞いて、少年は不敵な笑みを浮かべ、こう答えた。

「江戸川コナン。探偵だ」

第2話 団欒（だんらん）

「コナン君、今日の新聞見てみて。ほら、コナン君の事が書いてあるわよ。＜時効1日前！銀行強盗殺人事件解決。お手柄小学生！＞だって。すごいね。時効1日前だったんだ。ほら、お父さんも見てよ」

朝から新聞を持って、まるで自分の事のように喜ぶ蘭の姿は、無邪気でも可愛らしいが、目の前で新聞を広げられている小五郎にとって、単に食事の邪魔でしかなかった。億劫そうにするだけで、返事もしない。

「まったく、小学生のコナン君がこんなに活躍してるっていうのに、新一の奴、何をしているのかしら？事件事件って言って、ちっとも学校に来ないくせに、解決したっていう話も全然聞かないし…。新一もコナン君の事少しは見習えばいいのよ。ね、コナン君」

「は、は、はははは」

突然話題をふられて、笑うしかなかった。不自然に乾いた笑い方だったが、蘭はそれに気が付かない。

「新一、今、どこで何をしているんだろうね？」

（ここにいろっつうの…）

蘭の隣で、新一は冷や汗をかいていた。葉で小さくされ、コナンと名のるようになって随分経つが、この緊張感だけはなかなか抜ける事がなかった。

うまく探偵事務所をしている蘭の家に潜り込む事ができたが、何かと工藤新一の話題をふられ、その度にギリリとしてしまう。それはすでに条件反射となっていた。

ここで居候をするには、正体を知られてはいけない事は絶対条件。どうも最近、蘭がコナンの正体を疑っている節がある^{ふし}。

万が一正体がバレ、新一が生きている事を組織の連中が知る事となってしまうたら、自分に関わった人間すべてが危険にさらされて

しまう可能性が高い。

だから、蘭の口から自分の名を出されると、ついつい身構えてしまうのだ。

「蘭姉ちゃん。きっと、新一兄ちゃん、すっごく難しい事件に関わってるんだよ。それに僕、全然活躍なんかしていないよ。かくれんぼしてて、そしたら、たまたま犯人がそこにいたんだ……」

「そのっとおーりだっ！」

今まで無関心だった小五郎が突然大きな声を出し、2人は驚いた。「ったくよお、黙って聞いてりゃあ、蘭っ、新聞に載ったぐらいで大騒ぎするような事じゃねえんだっ。こいつが、たまたま入り込んだビルに、たまたま男がいて、そいつから逃げ回っているうちに、男が勝手にすっ転んで気を失って、警察呼んだら、たまたま、15年前に起きた銀行強盗殺人事件の犯人だっただけじゃねえか。そんなのは、手柄とは言わねえんだよ」

やたらと、＜たまたま＞を強調する。とにかく、ただの偶然だと言いたいらしい。最近大きな活躍がない小五郎にとって、この騒ぎはおもしろくないようだ。

「お、おじさんの言うとおり……だよ。蘭姉ちゃん」

小五郎の言うように、表向きの話は、遊んでいて偶然犯人の男を退治した事になっているが、実際は違う。歩美達と別れた後、廃ビルに入って行く不審な男を見つけ、後をつけたのだ。

すると男はビルの壁を崩し、何かを掘り出そうとしていた。明らかに男の行動はおかしい。このビルは明日、取り壊しが決まっている。それを知っていた新一は益々不信感を募らせた。

そして見た。男が手にしたモノを。

それは古びた札束だった。壁の中に埋め込んで隠してあったのだ。新一の脳裏に、最近ニュースで騒がれている事件の事が横切った。確か、米花町で起きたという銀行強盗殺人事件。人1人が死に、犯人と奪われた現金が消えたまままで時効を迎えようとしている。そんな内容だった。

まさかと思い、かまをかけると、すぐにボロを出した。こつちが子供だと思って気を抜いたのだろう。後は簡単だった。

気の弱い性格だったのか、追い詰められた男は新一に襲いかかって来た。それをキック力増強シューズで返り討ちにしたのだ。

まさか本当の事を言うわけにもいかず、適当にごまかし、偶然ということにしてあるのだが、あまりしつこく言われると、新一の方もおもしろくない。

「それにしても、犯人はどうやってビルの壁の中にお金を隠したんだろうね。一億もの大金、自分で壁に穴をあけて埋め込むなんて、そんなに簡単にできないと思うんだけど」

蘭は新聞をたたみながら言う。

「ばーか。そんなのできるわけねえだろう。うまい具合に穴は初めてから開いていたのさ。15年前ちょうど、あのビルは修繕工事をしていたからな。切羽詰まった犯人が偶然穴を見つけて、埋め込んだんだろう」

「ふーん。でも、取り出す時、大変だっと思わなかったのかしらね」「とりあえず、隠すことしか頭になかったんだろうな。ま、偶然とはいえ、隠し場所としては最高だったわけだ。なにせ、15年間誰にも見つからなかったわけだからな。しかし、犯人の野郎も運がねえよな。結局はこんなガキに見つかっちゃまったんだから、よっ」

「痛っ！」

額を箸でつつかれ、新一は小五郎を軽くにらみつける。

「もう、お父さんったら、行儀の悪いっ、やめてよね」

「ところで、蘭姉ちゃん。今日どこかへお出かけするの？」

これ以上つつかれてはかなわないと、新一は別の話題をふる。

「へっへー、今日は園子の家の立食パーティーなんだあ。午前中は映画とか見て、午後から会場の豪華客船に乗るの」

「そっか、だから、よそ行きの服を着てるんだね」

「あ、お父さん。私、今日は夕食食べてくるから、ちょっと遅くなるね」

「何っ、俺はそんな話聞いてないぞ」

「だって、言わなかったんだもん。だから、2人ともご飯は出前でも取ってすましておいてね」

「おいっ、蘭っ」

「いいじゃない。たまには。夏休みなんだし」

「コナンっお前も何とか言ってやれ。俺達をおいて自分だけうまいもの食いに行く気だぞっ」

「おじさん、ごめんね。僕も今日は歩美ちゃん達と遊園地に行くんだ。夕方には帰るから、お昼は1人で食べてね」

「なっ…」

「子供だけで行くの？大丈夫？」

「阿笠博士が後から合流するから、大丈夫だよ。ちゃんと行き方も分かるし」

「お前らな……」

「夏休みだしね、おじさん」

「そうそう、夏休みだしね」

新一と蘭は眼と眼と合わせにっこりと笑い合う。

「つけ、もう勝手にしろい！ったく、どいつもこいつも」

小五郎はそう言うと、蘭の手から新聞を奪い取り、2人に背を向けた。

「コナン、とっとと帰って来ねえと、俺一人で晩飯食いに行っちゃうからな！」

「はい」

2人のそんな会話を聞いて、蘭は思わず笑みをこぼす。

「お父さん。すねちゃったね」

「そだね」

蘭はコナンの耳に口を近づけ、囁いた。

普段はわがままな父親だが子供にかまってもらえず、すねる小五郎を見ると蘭はつい、かわいいと思ってしまっていた。

第3話 前兆

待ち合わせたのは駅の1番ホーム。新一は階段を上り、先に来て
いるはずの歩美達の姿をさがした。

さすがに夏休みともなると親子連れや若い男女の姿が目につく。

駅のホームは多くの人でごったがえし、そんな中から歩美、元太、
光彦の3人を見つけないければならないのかと思うと、新一はそれだ
けで疲れた気分になった。

（ああもう、このくそ暑い日になんで、遊園地なんかいかなきゃな
らねえんだ。灰原のやつ自分だけ来ねえでよ、ずりいよな。ったく、
子供同士の付き合いも楽じゃねえ）

新一は、そんなことを考えながら人混みの中をくぐり抜けて行く。
子供の姿だと、歩くのも一苦労だ。

「あ、コナン君いた。こっちだよ」

声のする方向に目を向けると、人混みの間から一瞬、歩美の姿が
見えた。いつも3人で行動を共にしている子供達のことだ、あとの
2人も近くにいるはずだ。

（あれ？）

人波に押され、うまく体を進めることができない。そうこうして
いるうちに歩美の居場所を見失ってしまった。

「歩美ちゃん、どこっー！！」

居場所を突き止める為に歩美の名を呼んだ、その時だった。

近くで若い女性の声がしたかと思うと、新一の体に強い衝撃が走
る。

「！！」

真横から突然ぶつかってきた何かに、新一の体は何の抵抗もなく、
空中に投げ出された。線路の上に落ち、レールで強かに肩を打つ。

間近には、電車が迫っていた。

「きゃああああああ！」

人々のざわめき、悲鳴。その中で一際大きく響き渡る、電車の急ブレーキ音。

「コナン君！」

「コナン！」

歩美達はコナン（新一）が線路の上に落ちて行く様を見ていた。

「おい！子供が落ちたぞっ！」

「誰か、救急車を呼べ！」

急ブレーキもむなしく、新一が落ちた辺りを電車は通り過ぎ、駅ホームの真ん中で停車した。

騒ぎを聞き付け、駆けつけて来た駅員も、その場にいた誰もが子供の死を確信した。

「あつぶねえ、間一髪」

「！」

車両の下をのぞき込み、子供の姿を捜していた駅員は驚いた。すぐ近くで、電車で引かれたであろう子供の声が聞こえて来たのだ。生きている。

「君っ、どこにいるんだい！」

「ここだよ。おじさん」

新一は無事だった。電車に轢かれる寸前、ホームの下に設置されている退避スペースに飛び込んだのだ。

大人1人がやっと入るくらいのスペースに、勢い良く飛び込んだものだから、体をコンクリートに打ちつけ痛い。

まったく、運が良かった。

元々このスペースは、数メートルおきに設置されているものだが、目の前にそれがなかったら、飛び込むことも叶わず助かることもなかっただろう。

「コナン君、大丈夫！？」

歩美は心配そうに電車の下を覗き込む。

「どこにいんだよ。いねえじゃん」

「元太君、ここから見えませんか。今、元太君が立っている真下にコナン君はいるんですから」

「真下？光彦、真下はコンクリートだぞ」

三人が話をしていると、電車のそばから離れるように駅員に言われ、白線の後ろまで下がる。電車を後退させ、避難スペースから助けようというのだ。

一瞬騒然となったホームでは、子供は生きているという情報が飛び交い、その姿を見ようと皆、電車の動きを見守った。

やがて、線路上に子供の姿を見た人々は安堵し、口々にくよかったとこぼす。そして、ホームは元の雰囲気を取り戻していった。

「怪我はないかい」

「うん、ちょっと肩を強く打ったけど、大丈夫だよ」

「どうして、線路なんかに落ちたりしたんだ。もう少しで轢かれてしまうところだったんだぞ、君。大事がなくて本当によかった」

新一を助け上げた駅員はほっとした口調で言う。あわや、人身事故を起こすところだったのだ、安堵した気持はとても強かった。

「女の人がぶつかって来たんだよね。私見てたもの」

「あ……うん」

歩美の言葉に曖昧に頷く。女性の声は聞いたが、実際には見たわけではなかった。

「僕、大丈夫っ!？」

その時だった。人混みをかきわけ、新一の傍に近寄って来た一人の若い女がその場にしゃがみこんだ。

「よかった……どこも怪我はない……?」

駅員が話を聞くと、歩美が言っていた新一にぶつかったという女性本人だった。

人が多いとはいえ、十分に気をつけてもらわないと困ると駅員が注意をすると、女性と言った。

「ええ。だけど、私も誰かにぶつかられたんです。あまりに強い力

だったので、私もこの子にぶつかってしまつて……そうね、ぶつかったと言うより、思いつきり体を押されたって感じが近いかしら」

駅員から嚴重注意を受け、新一達はその場を後にした。運転を再開した電車に乗り込み、予定通りに遊園地へと向かう。

「はあ、びっくりした。コナン、線路に落ちんだもんなあ」

「元太君の言う通りです。まったく、心臓が止まるかと思いました」
「でも、よかったね。電車に轢かれなくて」

「そうですよ。もう、こんなにびっくりすることはごめんです。コナン君、本当に気をつけてくださいよ……って、聞いてますか？コナン君」

三人が話をしている中、新一は一人考え込んでいた。女性が駅員に言った言葉が気になっていたので。彼女は誰かに体を押された感じがしたと、そう言っていた。

「人がいっぱいいて、コナン君のところに全然近づけなくて、私、コナン君死んじゃったかと思ったもの」

「歩美ちゃんだけじゃありませんよ。僕達もです。なかなか、近づけませんでした。駅員さんも苦労してましたし」

（……この人混みの中だ。人に当たらないで移動する事の方が難しい。でも、体を押された感じがするものなのか？しかし、俺も彼女に押されて、線路上に落ちた。思いつきりぶつかって来られたから、子供の体じゃ、ひとたまりもなかった……。誰かが故意に彼女を押した……？ホームから突き落とす為に？）

「まさか……？」

「なにが、まさかなんですか？コナン君」

「さつきから、ずっと上の空だよな。コナン」

「わりい、みんな。俺、今日はパスな」

「えっ、ちょっとお。コナン君、下りるところここじゃないよ！」

目の前の扉が開いた瞬間、新一は飛び出していた。駅員と女性の

会話が気になって、遊園地どころではない。いてもたってもいられなくて、新一はもとの駅へと戻った。

新一は歩道を歩いていた。周辺には建設中のビルが建ち並んでいる。

表通りには面していないので、人通りも少なく、工事の音がするとはいえ、人混みに比べれば幾分静かな気がする。

「って、何やってんだろうな俺……」

結局何も分かりはしなかった。あの女性がいるはずもなく、また行き交う人の中で目撃者を見つける事もかなわなかった。

待ち合わせた駅へ戻って来た時にはすでに、その場は何もなかったように普段の様子を取り戻していた。

「じゃあねえ、あいつらの相手をしなくてすんだだけでよかったとするか……とっとと帰ってテレビでも見るか」

新一が足を速めた時だった。

ガガガガガンンン……

「わああっ」

背後で大きな音をたてて何かが倒れる音と、人の声。

新一が驚いて振り向くと、そこには腰を抜かして座り込んでいる男と、数本の鉄筋が転がっていた。

「なっ……」

「大丈夫ですかっ！」

音を聞きつけたのだろう、建設現場から作業服を着た数人の男達が駆けつけて来た。彼らは、すっかり胆きもを潰して座り込んでいる男に近づき声を掛ける。

どうやら何処にも怪我はないらしい。

「君は！？君は大丈夫だったかい？」

声をかけられ新一はくはい>と曖昧に返事をする。そうなのだ、

一歩間違っていたら自分が鉄筋の下敷きになっていたかもしれない。それを思うと背筋がゾツとした。

作業服の男は新一に怪我がないことを確認すると、ほっと息をつく。

（電車の時といい、鉄筋といい、つたく、今日はついてねえな。これは家で大人しくしていたほうがよさそうだ）

「良かった：こんなものに下敷きになっていたら、大怪我だけじゃすまなかったよ。本当に申し訳なかった。：おいっ！鉄筋は倒れないうちにしっかり固定しておけと言っただろ！どういうことだこれは！」

男は新一の頭をなでながら、近くにいた仲間を怒鳴りつける。

「うっ…」

「本当にすまなかったな。怪我がなくてよかったよ」

そう言っつて男はその場を離れていった。

一方新一は、いきなり頭上で大声をだされたものだから、耳鳴りがしてしかたがなかった。

だから、新一には聞こえていなかった。作業員達が口々に鉄筋はしっかり固定されていたはずだと、そして何故崩れたりしたのか、皆目理由がわからないと言っている事に。

第4話 銃弾

「おじさん、どこいくの？」

新一が事務所の階段をのぼろうとすると、丁度、上から小五郎が下りて来た。

「なんでえ、コナン。遊園地に行ったんじゃないのか？」

家を出たのが9時頃と早かったので、今は11時を少し回ったところだった。遊園地から帰って来るには早すぎる時間だ。

「うん、それが行くの取りやめになっちゃって。帰って来たんだ。」

おじさんこそ、まだお昼には早いと思うけど……

「俺は、ポアロに茶あしに来たんだよ。こんな、くそ暑い日に仕事なんかやってらんねえからな」

（い、いつもの事じゃねえか。おっちゃんが、真面目に仕事をしている日の方が珍しいんじゃないの？）

「なんだよ、おめえも行きてえのか？」

「えっ」

あきれた眼差しを小五郎に向けてただけだったのだが、どうやらそれを一緒に行きたいのだと勘違いしたようだ。

「じゃあねえな、ほら、ついてこい。ついでに昼飯にするぞ」

「う、うん」

昼ごはんには早いなと思いつながら、新一は小五郎の後に続いてく喫茶店ポアロの扉をくぐる。

事務所の一階にあるので、蘭も含め3人はこの常連客だった。

店の中に入って来た2人にウエイトレスの梓が気安く声をかけてくる。

「いらっしやいませ。今日は珍しい取り合わせですね」

そういえば、小五郎と2人だけで店に来るのは初めてだった。こへ来る時はいつも、蘭と2人か、3人一緒だった。

「ああ、今日は蘭がいないんでね」

「はい、お水どうぞ。何になさいます?」

「俺は日替わりランチ。飲み物はホットね。コナン、お前は?」

「えっと、じゃあ、僕もそれで、アイスで」

「お前、コーヒーなんか飲めんのか?」

「あ、いや、間違えちゃった。僕、オレンジジュースっ」

小五郎に言われて新一はあわてて、訂正する。つい、高校生だった頃と同じ感覚で注文してしまった。小学生がコーヒーなんておかしい。本当は甘いジュースなんかよりも、コーヒーの方がいいのだが、小学生のふりをするのも、こうして食べ物や飲み物の好みまで気をつけなければならぬので、楽じゃない。

「あれ、コナン君。ひじから血が出てるよ?」

「えっ?」

左ひじに、固まった血が付いていた。たぶん線路に落ちた時に切ってしまったのだろう。

「まったく、何やってんだ、おめえは。ほら、腕かしてみろ」

小五郎は向い合せに座っている新一の腕をとり、おしぼりで血を拭い始める。

「どんくせえ奴だな。どこで何をして来たんだ。転んだのかあ?」

「いいよ、おじさん。自分でふけるから」

腕をひっぱられ、自然と上半身がテーブルの上に乗ってしまう。

そんな2人の様子を見ていた梓が突然クスクスと笑い出した。

小五郎はその声を聞いて、怪訝そうに梓の顔を見る。

「あ、ごめんなさい。毛利さん、蘭ちゃんがない時はちゃんとコナン君の世話をするんだなって思ってた…。まるで、本当の親子みたいですよっ」

「なっ、こいつはただの居候で……!」

「はいはい、わかってますって。お父さん。マスター、ランチツいです」

驚いて、思わず顔を赤らめてしまった小五郎をからかいながら、梓はその場を離れて行く。

「まったく、誰がお父さんだ。こんな生意気なガキ、俺の子供なわけねえだろっ」

小五郎はぶつぶつとつぶやく。

（それはこっちのセリフだっつうの……誰が誰の親父だってえ？）

「おじさん、もういいってば」

「あ、こら、まだふけてねえだろっ」

「痛っ！」

手を引っ込めようとしたその腕を小五郎が掴んだ瞬間、新一は肩に痛みが走るのを感じた。

「おわっ、なんだ」

「痛っっ」

小五郎が驚いて手を離すと、新一は左肩を押さえ、テーブルの上に突っ伏した。

（そういや、肩を思いっきり打ったんだっ……洒落になんねえくれえ痛え。これは、腫れてるな）

「なんだよ、そんなに強く掴んでねえだろ？」

「な、なんでもないよ」

「なんでもねえって、そんなに痛がって……って、おい！？」

袖の中からチラリと見えたそれに気付き、小五郎は新一のTシャツの袖をたくし上げた。

半袖に隠れていた肩と腕は、どす黒く変色し、酷く腫れ上がっている。これでは、痛がるはずだ。

「ひでえな……。一体何してこんなになってんだ……骨は折れてねえようだが……」

「転んだんだよ」

本当の事を言うわけにはいかないので、とりあえず、そう答えてみる。当然納得のいかない小五郎は怪訝そうな表情を見せた。

「転んだって……どんな転げ方すりゃあ、こうなるんだ……おい、その

肩大丈夫なのか？」

「平気だよ。触らなければ、全然痛くないよ。ほら、げんに今まで気がつかなかったくらいだしね」

「よかったら、救急箱お持ちしましょうか？」

運ばれてきたランチを受け取り、小五郎は梓の申し出に頷く。あいにく、救急箱の中には患部に貼るシップが入っていなかったため、冷却スプレーを振りかけける。最初は冷たくていい気持ちだったのだが、それはすぐに効果を失い、新一は余計に肩が熱を帯びてきたような気がした。

肩の腫れに気付くまでは何も感じなかったのに、一度気付いてしまったら、左肩が疼いて来るのだから、人間の体というものは不思議だ。

今日の日替わりランチのメニューは、焼肉だった。

2人は黙々とランチを口に運ぶ。何とも言えない気まずい沈黙がしばらく続いていた。新一も小五郎もこうして、2人だけになる事がほとんどなかったので、何を話せばいいのかわからなかった。そんな中、味噌汁を口に運びながら、ズキズキと疼きだした左肩に、新一が思わず舌打ちした音を小五郎は聞き逃さなかった。

「なんだ。痛むのか？コナン」

「えっ？あ、ちょっとだけね」

軽く肩をさすっている新一を見ながら、小五郎がおもむろに、口を開いた。

「そーいやあ、蘭も小せえ頃、よく転んで怪我とかしてきたなあ」

「そうなの？」

「ああ、蘭は空手もやってたから、そこらへんのガキよりも怪我が多かったんじゃないかな」

「ふーん」

「しかし、子供の頃って、何でそんなに転んだりするんだろうな。頭が重いのか？」

（重いかな……うん、言われてみればそんな気もするか）

新一は高校生だった頃の自分を思い浮かべながら、今と比較を試みた。

「ま、お前みたいここまで、ひどい怪我なんかしなかったけどなっ。お前、意外にどんくせえんだな」

「は、は、ははは」

昼食を終える頃、晴れ渡っていた空が、いつのまにかどんよりとした雲で覆われていた。

「あれ、さっきまで晴れてたのに…」

新一が窓越しに空を見上げると、ぽつりと一滴の雨が窓を鳴らした。それを合図にどんどん雨脚が強くなる。

「けっこう降ってきたな…：飯もくったし、帰るぞ、コナン」

席を立ちレジへと向かう小五郎の後をついていくと、カウンターの中に設置されているテレビが目に入った。

正午を告げる時報になる。

(12時か：)

――お昼のニュースの時間です――

グレーのスーツを着たアナウンサーが登場し、淡々とした口調でニュースを読み上げていく。

食品の偽造から始まって、少年犯罪の増加、通り魔事件。最近特に思うのだが、暗い話題が多すぎる。また、それが今ではありふれた出来事となってしまっ、嫌になる。

「おい、そんなところにつつまてないで、行くぞ」

新一はアナウンサーの淡々とした声を背に、慌てて出口へと向かった。

――続いて、15年前、米花町でおきた銀行強盗殺人事件についてです。――

「わ、マスター見てっ」

——一時効1日前に逮捕された幸島篤史^{（こうじまあつし）}45歳が今朝、県警へ護送中に脱走しました。警察では……——

「昨日捕まった犯人逃げたんですって、…何をやってるのかしら警察は」

ガラン……

扉の開くベルの音。小雨だった雨は大粒のそれへと変わっていた。
「こりゃあ、やみそうにないな」

「そうだね。ここでお昼済まして正解だったね。おじさん」

「濡れるのは一瞬だからな。おお、おお、みんな走ってるな」

軒下から一步踏み出したその時、新一はふと違和感を感じ、あたりに視線をやった。

それは一瞬。

事務所の階段までの数秒間。小五郎の後に続いて小走りに走りながら新一は気付いた。突然の雨を避けようと誰もが駆けて行く中、道路の向こうでたたずむ男が1人。

夏にはそぐわない、長袖のコート。伏し目がちにこちらを見ている。手はコートの中に隠れている。

——あいつは……あの男は……——

男の手が動いた。

（危ない）

その男が何者なのか、何が危険なのか頭の中で理解するよりも早く、新一の体は反応していた。

「おっちゃん!!」

新一は叫ぶ。地面を蹴り、小五郎目掛けて飛び出した。
コートの中から抜き出されたそれは、少しも標準を狂わせる事もなく、狙いを定めていた。

ガオオオオオオオオオンンン

日常において決して聞くはずのない破裂音。
雨が降りしきる街中でそれは、こだました。
ガラスが碎け散る音。
続いて、人々の悲鳴。
辺りは一瞬にして、緊張と恐怖の渦に巻き込まれた。

小五郎は何が起きたのか、すぐには理解ができなかった。ただ、目の前で赤い何かが、……赤い何かが飛び散るのを見た。

思考がうまく働かなかった。

コナンの小さな体がまるでスローモーションをかけたかのように、ゆっくりと崩れ落ちる。

腕に走った焼けるような痛みも、体を濡らしていく雨の冷たさも、全ての感覚が麻痺し何も分からない。ただただ、それだけを見ていた。

ばしゃんっ

一際大きな水音が鳴り、小五郎は我に返る。
気付いたら、足もとにコナンが倒れていた。小五郎はその場に崩れるように膝をつく。

「おい……コナン」

返事はない。小五郎は恐る恐る手を伸ばし、コナンの体を軽く揺さぶった。

「コナン……?」

その時、ぬるりとした感触が、手のひらを覆った。小五郎の手は赤く染まっていた。

流れる雨がそれを流し、落としていく。手がかすかに震えた。

「————コナン」

コナンは動かない。返事もない……。

「コナン、コナン！」

声は自然と大きくなる。

いつしか、のどの奥から声にならない声で、叫んでいた。

「コナン!!」

第5話 標的

「毛利君！コナン君が撃たれたというのは本当かね！？」

手術室の前の長椅子に座り込んでいた小五郎は、伏せていた顔を上げ、ばたばたと病院の廊下を走って来る人物の方へと視線をやった。

「目暮警部殿……」

目暮が数人の警官を引き連れていた。110番の連絡で、被害者が小五郎達だということを聞き、昼食もとらず雨の中を急いで駆け付け来たのだ。

「君の方は怪我はないのか？」

小五郎の姿は酷い有様だった。目暮は思わず眉をひそめる。

小五郎は全身ずぶ濡れで、着ている白いワイシャツは真っ赤な血で染まっていた。足元には薄く染まった小さな水たまりができている。こころなしか青ざめた表情で見上げてくる姿があまりにも痛い。々しかった。

「あいつにくらべたら……私のはかすり傷です」

「しかし、血が……」

「これは……あいつの」

小五郎はぼそりと呟いた。体に付着している血のほとんどはコナンから流れ出たものだった。

患部をおさえ止血し、コナンの体を抱きしめながら、救急車の到着を待ったのだ。小五郎は自分自身も銃弾が右腕をかすめ負傷していたが、雨の中、コナンの体を冷やす訳にはいかなかった。

打ちつける大粒の雨、そして患部を押さえいても止まることなくにじみ出る血液がコナンの体温を奪っていく。小五郎はそうはさせるかと、必死だったのだ。

「それじゃあ、コナン君は……」

目暮は言葉が続ける事ができなかった。

小五郎のワイシャツを染めた血がコナンのものとしたら、無事であるわけがない。まして、まだ6歳か7歳の子供だった。

分らないと、小五郎は軽く首を振る。

「今、手術中で詳しくは…ただ、コナンの奴腹を撃たれて…」

「そうか…で、親御さんにはもう連絡したのかね？」

「それが…」

小五郎は言いにくそうに語った。

「連絡先が分からない？ そんな馬鹿な話があるのか。君はコナン君を親御さんから預かっているんじゃないのか？」

「あいつは、蘭の奴が連れて来て…なんでも親が海外出張になって行く場所がないからって…」

「それじゃあ、蘭君に聞けばわかるんじゃないのかね？」

「蘭は友達の立食パーティーだとかで、今は海の上で…携帯がつかからないんです」

「今まで、親御さんとの連絡もとらずにコナン君を預かってたのか。コナン君の親も自分の子供を他人に預けるんだ、連絡の一つくらい入れて来てもいいじゃないか」

「一度だけ会ったことが…でもあいつの母親はすぐに行っちゃって…養育費だって金を置いて…」

「そんなっ無責任な…それじゃあまるで」

（捨てられたみたいではないか）

目暮はコナンが置かれている環境に初めて愕然とした。

時々見せるコナンの大人びたしぐさや表情、子供とは思えないセリフもこれで納得ができる気がした。

6歳といえば、まだまだ母親に甘えたい盛りだろうに、この少年には甘えられる親はいないのだ。他人に金を渡し、自分の子供を預けていても連絡の一つもよこさない。海外出張か何か知らないが、連絡先すらはつきりとは分からない両親。

他に何か事情があるのかもしれないが、この少年は1人で何でもやらなくてはならない環境で育ってきたのだと思った。だから少年

はあんなにも大人びでしまった。

親元を離れ、他人の家に居候する事はどんなにか心細い事のはずなのに、1人でいる事に慣れ、さみしさを口にする事もできないのだ。

（かわいいそうな子だ……）

両親が外国暮らしであることを除けば、すべてはコナンⅡ新一であることを隠すためのフェイク。姿は子供でも、中身は高校生、大人びて当たり前である。

そんな事を知るはずもない目暮が大いに勘違いをしていると、思い詰めた表情で小五郎はつぶやいた。

「コナンの奴：撃たれる前に俺の名を呼んだんですよ、目暮警部。きつと、俺を狙っている銃口に気が付いて：コナンは俺の前に：つとに馬鹿な奴だ。おれの代わりに撃たれちまって、どうするんだ」

「毛利君：」

「……ガキのくせに、俺なんかをかばいやがって」

「それが、そうともいいきれんのだよ、毛利君」

「は？」

目暮の突然の物言いに小五郎は思わず聞き返した。

「いや、コナン君が君をかばおうとしたことを否定しているわけではない。それは事実だろう。ただ、私が言いたいのは、銃口は君を習っ狙っていたのだろうか、ということなのだ」

「何を言って……」

「犯行に使われた銃弾は2発。現場に残されていた銃弾を調べたら、ある事が分かった。犯人は確かに君を狙っていたのかもしれない：しかし、コナン君を狙っていたという可能性を捨てることができないのだ」

「んな、ばかな。何故子供のコナンなんかを」

「……幸島篤史が逃げた。護送中に」

「なんですって!？」

「15年前、奴が銀行を襲った時に使用したものと一致した。その

銃で店員を1人射殺している……もし、今回君達を襲った犯人が幸島だとしたら、狙われているのは君ではなく、コナン君だと考えておそろく間違いない」

「そんな…まさか、あいつはただ…」

「そう、コナン君はただ通報しただけだ。自分の不注意で気絶した幸島を見てな。しかし、時効1日前だった幸島にしてみれば、コナン君は憎むべき対象だった」

「……」

「奴を連行していた警官に聞いた話によると、奴の精神状態は尋常ではなかったらしい。ずっと（あのガキ、あのガキ）とつぶやいていたそうだ。そして奴は逃げた。護送中という嚴重な警戒の中で、全ての警官を殴り倒してな」

「……」

小五郎はまだ見ぬ男の執念を感じた。護送中に逃げ出すことができる程、男の憎悪は大きかった。つまりは、そういうことなのだ。目暮の考える通り、狙われたのはコナンということか。

「目暮警部！」

目暮の話が一段落付いた丁度その時だった。軽く息を弾ませた、高木刑事がこちらの方へと走り寄って来た。

「おお、高木君。何か分かったのかね」

「ええ、幸島の足取りを追ってきたんですが、奴がこの近辺に潜んでいる事は、ほぼ間違いないようです。米花駅で幸島らしき人物を見たという女性の証言がとれました」

「そうか……」

「それですね、目暮警部。聞き込みの中で2、3気になる事が……」

「何かね」

「ええ、1つは幸島を見たという女性の証言なんですが、今朝、米花駅の線路に人が落ちたというんです。ちょうどその時電車が入ってきて、あわや人身事故になりかけた……」

「それが、幸島の件と何の関係があるというんだ」

「その女性が言うにはですね、線路に人が落ちたのは子供だったというんです」

「子供…」

黙って高木の話聞いていた小五郎だったが、線路に落ちた子供という言葉に引掛かりを覚えた。まさかという思いが頭の中を過る。

「どうも…その子供というのが、コナン君のようなんです。目暮警部」

「なんだって!？」

(コナン…!)

小五郎の予感的中した。コナンがひじから血を流し、肩を腫れあがらせていた理由は線路に落ちたからだ。決して転んだからではなかった。

(くそっ、もっと俺が注意をしていれば…)

激しい後悔の念が胸中を駆け巡る。子供の言うことをうのみにするではなかった。おかしいと感じていたのに、転んだという言葉で片づけてしまった。軽率だった。もっと詳しく事情を聞いていれば、こんな状態に陥る事もなかったかもしれないのに。

「あともう1つ。幸島の足取りは米花駅で途切れてしまったのですが、近くの建設現場で事故がありました。駅の転落事故から、数十分後の事です。設置してあった鉄筋が崩れ、人を下敷きにしてしまふところだったと…もちろん鉄筋は倒れないように細心の注意をはらって固定してあったそうで、なぜ倒れたのか原因が分からないということだったんです。ただ、気になるのがその下敷きになりかけた人達の中に…」

「コナン君がいたのか」

「え、ええ。とにかく誰も怪我人はいなかったそうなんです、話のくだりに、眼鏡をかけた6、7歳の男の子がいたと…目暮警部、思うんですが…もしかしたらコナン君を撃った人物というのは…」

目暮は肯定の意味を込め、高木に向ってしっかりと頷いてみせた。
最悪の事態だった。

「毛利君」

目暮は振り返る。額には汗をかいていた。

「これで、可能性ではなくなった。君が狙われていたのではない。
コナン君が狙われたんだ。警察の手から逃れた強盗殺人犯……」

――幸島篤史に――

手術中のランプが消えた。扉が開き、手術着を着た医師が現れる。

「先生……っコナンは」

「お父様ですか？大丈夫。助かりますよ」

その言葉を聞き、小五郎はほっと肩を撫で下ろした。

「幸いにも銃弾は急所を外れていました。しかし、患者は幼い子供
です。応急手当がなければ危なかった。……あなたですね」

医師は、小五郎の血で染まったワイシャツを見てそう言った。

「的確な止血、そして、雨の中体を冷やさずにいた事が良かった。

お父さん、あなたが、あの子の命を救ったんですよ」

笑みを浮かべそう言うと言と医師はその場を立ち去って行った。手術
を終えた新一が小五郎達の目の前を横切って行く。

「コナン……」

「毛利君。本当に申し訳ない。我々警察のミスだ。幸島を逃がさな
ければ、君もコナン君もこんな目に合わなかった」

ストレッチャーで運ばれて行く姿を見送りながら、目暮は小五郎
に詫びを入れる。そして、傍に控えていた警官2人をうながした。

警官達は心得ていたようで、一度頷き、新一が運ばれて行った先
へと向かった。

「彼らにはコナン君の警護をしてもらう。再び幸島が現れる可能性
が十分にあるからな。それから、コナン君が落ち着いたら警察病院
の方へ移した方が良いだろう。コナン君は必ず我々が守る」

「目暮警部殿……」

「高木君、署に戻る前に一度病院周辺を調べておこう。それじゃあ、毛利君、これで失礼するよ。……あ、と、それから」

「？」

慌ただしく踵を返した目暮であつたが、ふいに立ち止まり、小五郎を振り返った。

「毛利君、君も早く怪我の治療を受けたまえ。かすり傷と言っていたが、私にはそうは思えんよ。ああ、その看護師さん。この男をみてやってください」

そう言い残し、目暮は去って行った。

目暮が指差した先には、新しい血液が腕をつたい流れ落ち、床を汚している小五郎の姿があつた。それを見た看護師は驚き、小五郎を急いで処置室へとひばって行ったのだつた。

第6話 報復

（はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ）

新一は息を切らせながら暗闇の中を走っていた。

ここが何処なのか、何故自分は走り続けているのか分からない。
随分長い間走っているはずなのに、少しも遠くまで気が気がしないのは何故だ。

自分は今、見えないゴールに向かって、ただひたすら走り続ける。
だけど、それはどうでもいいことだった。

ただ一つ、時折体を感じる違和感だけが問題だった。自分が自分でないような不思議な感覚。

まるで、他人の体を借りて動かしているようで、実感が湧かない。

（何か変だ）

そう思った瞬間だった。何もなかった空間に沢山の鏡が現れた。

周りを覆い尽くす 鏡 鏡 鏡

驚いた新一は足を止め、そして見た。

冷や汗が頬をつたう。数十、数百枚もの鏡に囲まれ、そこに映し出される己の姿を凝視した。

（これは誰だ――）

思わず手を伸ばし、鏡に触れる。

――お前は誰？――

そこに映るは子供の姿。一瞬、息が止まる。そして恐怖に似た感情が生まれた。

誰だ。これは。一体誰なんだ。

何度も何度も頭の中をかすめていく言葉。だけど、新一は知っていた。

そこにいる子供が誰なのか。

――お前は……

見覚えのある姿。もう二度と見るはずのない幼き頃の自分

（俺だ――）

『工藤新一』

不意に名を呼ばれ、新一は振り返る。

『まさか、そんな姿になって生きているとはな』

そこには薄笑いを浮かべ、たたずむ黒づくめの男達がいた。

（お前達は……っ）

銃口がこちら狙っている。新一は咄嗟に身をひるがえし、走り出した。

『新一』

すると、再び背後から名を呼ばれ、その聞きなれた声に驚いた。

新一は振り返る。狙っていた銃口がかすかにそれていくのを見た。

（蘭！）

蘭はこちらを見て微笑んでいた。

『新一……』

男が引き金に手を掛ける。

（逃げろ！）

銃声が暗闇の中を鳴り響いた。心臓が凍る。新一は声を張り上げ叫んでいた。

「蘭！」

目を見開き、一番最初に飛び込んできたモノは見知らぬ天井だった。

（ここは……）

新一は一瞬、自分た何処にいるのか理解する事ができなかった。呼吸が荒い。ひどく汗をかいていた。乱れた呼吸を落ち着かせながら、ようやく、夢を見ていたのだということに気付く。

（今……何時だ）

今が夜だということは分かる。辺りが薄暗いのは街灯の明かりが窓から差し込み、部屋の中を照らしているからだ。

「つつ……」

あてられていた酸素マスクを外し、体を起こすと腹部に鈍い痛みが走った。

（そうか、俺、腹を撃たれて……）

どうやら、ここは病室のようだ。静まり返った病院の一室に、雨の降る音が響いていた。

ぼやけた思考が次第に鮮明さを取り戻す。

あの時、咄嗟に小五郎に向って飛び出していた。

銃声が聞こえ、痛みを感じるまもなく意識を失った。しかし、思考が暗転する瞬間、確かに見た。あれは……

（幸島篤史だ）

「う……ん」

「！」

不意に人の気配を感じた新一は肩をビクリと揺らし、小さく驚いた。

気配の感じた方へ視線をやると、そこには小五郎の姿があった。

新一が寝てるベッドのすぐそばで、椅子に腰かけた小五郎は腕を組み、かすかに寝息を立てている。

「おっちゃん……」

ワイシャツは着ておらず、肩に羽織っていた。腕に巻かれた包帯が薄く血に染まっている。

新一はかすかに眉をひそめ、軽く舌打ちを打つ。

（くそっ……）

最初は小五郎が狙われたのだと、そう思った。しかし、この瞳に焼きついた幸島の姿が間違いだと言っていた。

俺のせいだ。

小五郎が狙われたわけではなかった。

（おっちゃんは、俺の巻き添えをくったんだ）

おそらく駅での出来事も、建設現場での事も全て幸島の仕業に違いない。奴は復讐を果たすために警察の手から逃れ、自分の前に現れたのだ。

（俺だけならまだいい。だけど、あの男は――）

ガシヤアアアアアンンン！！

「！！」

「な、なんだ、なんだあ！」

突然の破壊音が新一の意識を現実へと引き戻した。驚いた小五郎は椅子を派手に倒し、飛び起きる。

眠りから覚め、最初に小五郎の眼にと見込んできた物は、赤々と燃える新一のベッドだった。

火炎瓶が投げ込まれたのだ。

ベッドの横の窓ガラスは無残にも砕け散り、その破片は新一へと注がれた。

破片は新一を傷つけたが、投げ込まれが火炎瓶はその身を避け、足もとのシートと、床の上で砕けた。

飛び散ったオイルに火が引火し、薄暗い部屋の中で炎が揺らめいている。

「何事ですかっ！ ああっ」

病室の外で警護していた警官2人が音を聞きつけ、部屋の中へ飛び込んで来る。目の当たりにした惨状に思わず驚きの声を漏らした。「火だ！ 消化器持ってこい、！ それと、近くに奴がいるはずだっ！ 捜せ！」

「はっ！」

警官達は小五郎の声に駆け出す。

「コナンっ、ベッドから下りろ！」

椅子に掛けてあったスーツの上着を手に、小五郎は叫ぶ。しかし、新一は動けないでいた。

窓ガラスが割れた瞬間、急に動いたのがまずかった。痛み止めの麻酔が切れかけていたらしく、激痛が体全体を駆け巡り、まるで金縛りにあったように新一の体をベッドの上に留まらせていた。

こうしている間にも火はオイルがしみ込んでしまったシーツの上にどんどん燃え広がっていく。

「ちっ、来いコナン！」

ベッドにうずくまり動こうとしない新一の体を、小五郎は片手で抱えあげた。

「おじさん！ 腕っ」

「うるさい、黙ってろ！」

銃で傷つけられた腕が、新一の体を支える。痛くないはずがないのに、それでも小五郎はもう片方の手で、火を消そうと何度も己のスーツを叩きつけた。

「どいてくださいっ！ 毛利さん！」

駆け付けた警官は手にした消火器を叫ぶなり噴射した。部屋中を白い煙でいっぱいにし、火を消していく。その様子を廊下に下ろされた新一は、入口に立った小五郎の蔭からじっと見ていた。

「ったく、なんてやろうだ」

小五郎はうなるように呟いた。おそらくその心情は新一と同じものであったに違いない。

下手をすれば火だるまになるところだった。それだけではない。怪我や病気で体が不自由な人間が沢山いるこの場所で火事にでもなったらと思うと、それだけでも恐ろしい。

自分だけではない。何人もの人が巻き込まれたかもしれないのだ。新一はふつふつと怒りがこみ上げて来るのを感じた。

（許せねえ……っ）

今といい、今朝の事といい、その全てが幸島の考えを物語っていた。

『誰が犠牲になろうとかまわない』

奴はそう言っている。

自分だけではない。このままでは関係のない人達まで危険にさらしてしまう。小五郎がその1人だ。

（ここにいては駄目だ）

そんな強い思いが新一の体を突き動かしていた。

（誰も、巻き込むわけにはいかない）

「いいぜ……決着をつけようじゃねえか」

新一は誰にも気付かれぬよう、病室をそっと後にした。

コナンが姿をくらました事に気が付いたのは、完全に火が消し止められた後の事だった。

もうもうと煙る白い霧が薄れてく中、小五郎は慌てて廊下へと飛び出した。しかし、時既に遅くコナンを捕らえる事はできなかった。

「……っ、外へでたのか!？」

目を離したのは、ほんのわずかな時間だった。ついさっきまで、この腕の中にいたのだ。腹に重傷を負っているその小さな体で一体

どこへ消えたというのか。

「！」

まさか。

一瞬脳裏をよぎった考えに、小五郎はその場に硬直する。病院から消えたということは…。

あの子供の事だ、ありえないことではない。いや、きっとコナンは行動を起こす。小五郎は確信していた。

背後で自分を呼び止める声が聞こえたが、それを振り切り駆け出していた。

「あの……、馬鹿がっ！」

第7話 幸島

どこか冷たい感じのする無機質な世界。

降りしきる雨が痛かった。

新一はズキズキと痛む足を引きずりながら、コンクリートに閉ざされた空間を1人歩いていた。

切れた痛み止めに顔をしかめ、腹部を押え耐えていた。それでも新一は歩みを止めようとはしなかった。

容赦なく降り注ぐ雨が、新一の体温を奪っていく。しかし、怒りに燃えた熱は冷めたりなどしなかった。今、新一の頭の中は幸島と決着をつけることでいっぱいだった。

（あそこがいい：奴はきつと俺を見つけるはずだ）

そこはビルの建設現場だった。まだ鉄筋だけが組まれただけの、骨のようなビル。周囲には山積みされた砂や、赤茶けた鉄筋が無造作に置かれている。いざという時、身を隠すには丁度いい。

新一は現場へと足を踏み入れた。

水分を含んだ土がべちゃべちゃと足にまとわりつき気持が悪い。その時になってようやく新一は自分が裸足である事に気が付いた。とにかく1人になる事だけしか考えてなかった新一は靴を履く事すら忘れていた。

一瞬不快感を顔に表したが、それはすぐに消え失せた。今は余計な事を考えている暇はない。振り返り、現場の入口へ視線をやる。

まだその姿はない。新一はゆくりと背後にある積み上げられた鉄筋の上に腰かけた。

幸島篤史はもうすぐここへ現れる。新一には確信があった。

（来いよ）

命を狙われたのは火炎瓶を入れて4度。

（近くにいろんだろ？）

つまり幸島は常に傍にいたということだ。ずっと殺す機会を窺っ

ていた。

奴は4度の失敗に苛立っているに違いない。

何が何でも殺したいと思っている人間が病院からのこのこと出て来たのだ。

(こっちからわざわざ1人になってやったんだ)

視界の中に薄暗く照らされた道路があった。その上の街灯は切れかけ、チカチカと点滅している。

新一はそれをじっと見ていた。

(邪魔する奴は誰もいねえよ)

――だから

(出て来い。幸島)

新一は唇の端をつり上げ、笑った。

点滅の中、浮かびあがる人影が一つ。手には銃を持っていた。

男の視線が新一の姿を捕らえる。恐ろしいまでの憎しみを込め、こちらを見ていた。

じりじりと、歩み寄って来る顔に確かに見覚えがあった。

「待ってたぜ…幸島」

新一の声に、男の歩みが止まる。

ぎらたついた視線が新一の瞳を射抜いた。まるで、かみつく前の獣の目だ。

「……お前には色々言いたいことがあるんだぜ？幸島…色々とな」
「なんで…だ」

男は絞り出すように呟いた。雨音でよく聞き取ることができない。

「なんで…てやがるんだ」

「…幸島？」

手に持った銃をギリギリと握りしめているのが分かる。爪を立て、

そこらかすかに血が滲み出ていた。

幸島が吠える。

「ええっ！なんで生きてやがるんだって聞いてんだよ！！」

あからさまな憎しみの感情をその身に受けても、新一は臆することなく幸島の姿をじっと見ていた。

「しぶとくて悪かったな。…幸島」

心の奥底で燃え続けていた怒りの炎が、勢いを増していくのを感じる。

「お前のした事は、他人を巻き込んだ。分かっているか幸島。駅では1人の女性が、建設現場では男性が、そしてアポロでは毛利のおっちゃんが命を落とすところだった。お前は関係のない人達を巻き込んだんだっ！」

「だから？」

「なにっ」

「だから、なんだって言ってんだよ。え！？くそガキ。お前が死ぬばそれでよかったんだよ。他の人間がどうなろうと知るか」

男の物言いに体が熱くなる。新一は腰かけていた鉄筋の上に、勢いよく立ちあがった。

「何度殺しても、生き返って来る…。何度も何度も…」

幸島がこちらを見ながらぶつぶつと呟く様は不気味だった。その時になって初めて新一は背筋に悪寒が走るのを感じた。

（な、なんだ…）

幸島の憎しみようは普通じゃない。確かに新一は時効寸前の幸島を捕まえ、警察へ突き出した。外見年齢6，7歳の子供に気絶させられ、逮捕された犯人にすれば面白くない事は分かる。

でも、男の新一の死に対する執着はそれだけが理由とはとても思えなかった。

一体その感情はどこから生まれてきているのだろうか。何故そんなにまで、自分を殺したいのか。

頭に浮かんだ疑問を、新一は思わず口にして叫んでいた。それに

対し、幸島は半ばつぶやくように答えた。

「俺は15年間ずっと待っていた……。奪い取った金をおおっぴらに使える今日という日を。だけど、お前が現れて…俺の計画はすべて狂った！」

男は話す。あるだけの憎しみを込めて。

つまらない人生、つまらない世の中。つまらない人間。

俺は自分を取り巻く環境のすべてが嫌いだった。

男は幼い頃から不幸だった。

貧しい家庭に生まれ、家族三人が食べていくだけでも精一杯、玩具の1つも買ってもらった記憶がない。

人間関係を苦手とする父親は仕事がうまくいかず、何をやっても長続きすることがなかった。

しまには酒に溺れ、まわりに当たり散らす、ろくでなしになった。母親は泣いていた。毎日のようにふるわれる暴力。不機嫌な夫に蹴られ、自分の子供が父親に死ぬほど殴られていても、ただただ泣いて見ているだけだった。

そんな陰鬱くいんうつゝな生活が何年も続く。

高校生に上がる頃には無数の傷跡が体中に刻まれていた。

怪我を負わされても治療せず、そのまま放置された結果だった。病院へ行けば、その傷をみた医者に不審に思われる。酒でらりった頭でも、そういう事に関しては、ちゃんと機能していたらしい。

この頃の父親の口癖はもっぱら、

（高校へ行く暇があるなら働け）だった。

男は高校になんの執着もなかったが、その言葉が逆に学校へと足を運ばせた。

高校の学費は母親がどこからか工面してきたらしい。

どのように金をつくってきていたのかは分からない。ただ、父親が酔いつぶれて寝静まった夜に、家をあける事が多くなっていたのには気付いていた。

服装が派手になってきたのもこの頃だ。それでも家にいる時には決まって涙を流していたように思う。

酒の量は相変わらずだったが、父親の暴力は幾分減っていた。

それは、父親が年をとったせいなのか、子供だった男が父親と体格が変わらない程に成長したからなのか、分からない。

そんなことは男にとってどうでもいいことだった。

頭の中にあったのは、今が絶好の機会だということだけだった。

友達と呼べる人間は誰一人として、いなかった。むしろ、同世代のクラスメイト達が疎ましくて仕方がなかった。

自分の隣で、集団を作り、行動する。楽しそうに語り合い、笑い合っている姿をみると無性に腹が立った。

何故こんなにも自分と違うのか、見せつけられている気がした。

笑い声が耳について離れない。何をそんなに笑っているのか、何故そんなにおかしいのか、自分は少しも楽しくないのに。

自分は笑えない。男には笑うという感情が理解できなかった。

その時になって、初めて気が付いた。自分はいまだかつて、笑った記憶がない事に。

クラスメイト達の笑い声はいつしか、自分に向けられているのではないかと感じるようになっていた。

嗤くわら>っている。わざとだ。わざと目につくように自分の周

りで嗤っているのだ。

俺はこいつらに蔑まれている。

男は孤独だった。

そうして男は高校の卒業を待たずして、家を出た。

学校での生活に意義を見いだせないことはもちろん、鬱々とした生活、息苦しい毎日。もうこれ以上両親と一緒に暮らすことはできなかった。

少しも変わろうとしない親達に愛想がつきた。

いてもいなくても同じなら、捨ててしまえ。男はそう考えた。

高校中退、そして17歳という年齢は職に就く事が難しかった。

それでも何とか働き口を見つけ、住む場所も見つけた。

飲んだくれの父親も、泣く事だけしか能のない母親もない日々。男はそれを孤独とは思わなかった。むしろ、解放感の方が強かったと言っている。

仕事に出る億劫さを少し我慢すれば、こんな生活でも悪くないと思った。

しかし、この平穏な日々もそう長くは続かなかった。

ある日の事だった。いつものように仕事に出た男を待っていたものは、同僚達の冷たい視線だった。

わけも分からず連れて行かれた更衣室。そこで目にしたものは、荒らされたロッカー、そして床にぶちまけられた自分の荷物だった。

男は言葉がでなかった。

一体これは何だというんだ。何だ、何だ、何だ。

男の思考はまるで壊れたテープのように、ぐるぐると同じ場所をめぐった。

視線がおよぐ。訳が分からない。男は答えを求め、同僚達を振り返った。しかし、そこにあったのは変わらぬ冷たい視線だった。

『カネハドコダ』

男はわが耳を疑った。言っている意味が分からない。金？なんの事だ。一体こいつらは何を言っているんだ。何だ。何だって言うんだ。俺の荷物、どうして。

『ドコヘカクシタ』

まさか、まさか、まさか、男の目は大きく見開かれた。
金、知らない、俺は金なんか、何で、どうして、俺は、知らない。

『オマエガヤツタンダロ』

最初に男を殴りつけたのは誰だったのか。気づけばその場にいた全員に取り囲まれていた。

一方的な暴力。

与えられる痛みとは別に、男は頭の奥が研ぎ澄まされていくのを感じた。

体の感覚はすでない。

ただ、長年、男の中でくすぶっていた意識が次第に膨れ上がっていくのが分かった。それは、ずっとずっと見ないフリをし続けた、汚らしい感情だった。

男は我知らず叫んだ。

それは決してあの男、自分の父親の様にはなるまいと崖っぷちで耐えてきた最後の糸が切れる音だった。

第8話 決着

降りしきる雨がより一層強くなる中、小五郎は走った。

視界はどんどん悪くなる一方だ。体に打ちつける雨が痛い。

（コナンの奴、一体どこまで行ったんだ。まだそんなに遠くまで行っていないはずだが）

なによりも手術したばかりの体だ。歩くことさえままならないはずだ。まして、あの小さな体でこの雨に耐えられるはずもない。

小五郎は焦った。早く見つけなければ。大体あのガキはいつも1人で先走り、事件とみれば直ぐに首を突っ込みたがる。それが、自分の命に関わる事だとしてもだ。

小五郎には分かっていた。

コナンが幸島の注意を自分だけに引き付けるために病院を抜け出したということ。

周りの人間に危険がおよばないようにと考えたのだ。コナンは。

そう、コナンは気づいたんだ。幸島に狙われているのは小五郎ではなく、自分自身だという事に。

「くそっ」

見つからない。あたりにしきりに目をやるが、コナンの姿は一向に見当たらなかった。

（どこにいるんだ、コナン……）

どこかのビルの建設現場に差し掛かった時だった。チカチカと点滅する街灯にふと目線がいくと、視界の片隅に人影が横切るのを見た。

小五郎は咄嗟に、コンクリートの壁に身を潜めた。視界が悪く、さらに薄暗い建設現場の奥に目を凝らすと、そこに幸島の姿を見る。

（……幸島！）

小五郎は幸島の視線の先を追う。

いた。コナンだ。鉄筋の上に腰かけ、右手は腹部を押さえている。いかにも辛そうな表情をしていたが、その目はまっすぐ幸島の姿を捕らえていた。

それは子供のする目ではなかった。

今まで見たことのない強い眼光。痛みに眉をひそめながらも見せるそのまなざしに、小五郎は驚きを隠せなかった。

(…コナン)

小五郎は気取られぬよう、距離を縮めていく。

よく見ると幸島の手には銃が握られている。激しい雨とで聞き取りにくいが何かを喋っているようだった。

「いい気味だったぜ、俺を馬鹿にした奴らが全員足もとに這いつくばる様は。自業自得だ。俺は何もしてねえのに、ふざけやがって！当時、俺が高校中退のガキだったからって、何の証拠もなしに人を犯人扱いしやがったんだ！全員ぶちのめしてやったさ！こうして、こうしてっ、こうして！こうしてなあっ！」

次第に幸島は興奮し、バシャバシャと雨にぬかるんだ地面を何度も踏みならす。視線はさだまらず、完全に過去の自分に舞い戻っているようだった。

「ふざけやがって！ふざけやがって！どいつもこいつも、死んでしまえっ！つまらねえ人間どもめ！俺をこんなにしたのは世間だ！くそじじいに、くそばあだっ！俺は悟った。このくそつまらねえ世の中をおもしろおかしく生き抜くには金が必要だ。真面目にしてりゃあ、こっちが馬鹿を見るっ。何もかもうまくいかねえのは周りの連中が悪いんだ！邪魔にするなっ、俺を邪魔にするんじゃないやねえっ。殺してやるっ俺を妨げる奴！俺を馬鹿にする奴！全てだ！お前もっ、ガキだからって例外はねえっ！」

幸島のわめき散らす声は小五郎の耳にもしつかりと届いていた。
異常な興奮状態だった。

「狂ってやがる…」

何が奴をそうさせるのか、小五郎には少しも分からなかった。いや、今はそんな事を考えている暇はない。少しでも早く、そしてできるだけ近くに身をひそめることを考えた。

いつでも飛び出せる様にだ。その銃口がコナンに向けられるのは、時間の問題のように思えた。

「！」

まさにその時だった。

小五郎の視線の先で、ゆっくりと両手が持ち上がる。その手には拳銃が握られていた。

「死ねよ、ガキ。死んでくれ」

先ほどのわめいていた姿が嘘のように、静かに、そして冷めた声で幸島は言った。

(……コナン！)

「……んじゃんえ」

小五郎が飛び出そうと身構えた瞬間、幸島の体がピクリと揺れた。

「何だと…？」

新一はつきつけられた銃口をまっすぐに見据え、届かなかった言葉
を今度は大きく叫んだ。

「てめえこそ、ふざけんじゃねえ！」

声が傷ついた腹にビリビリと響く。はつきりって、苦痛だった。
だが叫ばずにはいられない。新一は腹が立った。すぐく腹が立った

のだ。

「ふざけんじゃねえよっ。うまくいかねえのは何もかも周りのせいだど！？そんなわけがあるもんか。世の中にはなあ、どうにもならねえ事だってあるんだよ！どんなに努力したって上手くいかねえ時は上手くいかねえんだよ！誰だってそういう時があるさ。俺だって、お前だってそうだ。例外なんてありやしねえ。ずっとうまく人生を歩んでいる奴がいたらお目にかかりてえよっ！」

小五郎は耳を疑った。確かに大人びた生意気な子供だったが、これは一体どうしたというのだろう。これが7歳の子供が言う言葉か？

「俺が今まさにそうだ。はっきりって、崖っぷちだ。探し求めている手がかりが掴めそうで掴めねえ。答えがすぐそばにあるはずなのに、手が届かない。…いつまでもこのままじゃ、だめなんだ。…俺には時間がねえ。お前と違ってなっ。俺だって苦しいんだ、辛いんだ！…焦っている自分が情けなくて、待たせている奴には合わせる顔がなくてっ…俺だって…！」

新一は消沈していく心を奮い起こし、目に力を込める。

「だがなあ、俺はうまくいかねえ事を、人のせいなんかにしねえ。間違っているんだよお前は。世間がお前に優しくなかったとしても、傷つけていい理由なんかにならない。世の中がつまらないと感じても、それを粛清する権利も何も…幸島、幸島っ、信じてみろよ一度でいいから。そんな、寂しい事を言うなよ。なあ、幸島」

幸島は自分を取り巻く環境、すべてを憎んでいる。だから、平気で人を傷つけ、邪魔になるものは躊躇なく排除した。誰を巻き込もうとかまわない。自分さえ安全な場所にいることができればいいのだ。そんな精神の持ち主である幸島に、新一は心底怒りを覚えた。それは事実だった。しかし、それと同時に、悲しかった。どこまでも孤独な幸島が哀れでならなかった。

「幸島……」

「……きれいごとをいってんじゃねえよ。……くそガキ」

幸島の口元に不自然な笑みが浮かぶ。銃口は依然として向けられたままだった。

「生まれて10年も経ってねえガキが何を言ってやがる。人生だど？ 一体お前に何が分かるって言うんだ。人生に光だって？ そんなきれいごとが通用するものか。俺は時効が来るまでの15年間、ずっとなりを潜めてきた。金を手に入れて、こんな腐れ切った場所から高飛びするためにな。これまでに何一つとしていい事なんかなかったぜ。今日まで、したくもねえ仕事をして、ずっと、我慢続けた。俺の周りの連中は相変わらずだった。俺を馬鹿にしがって、俺を苦しめる。邪魔ばかりしやがる……！」

銃口が小刻みに震えていた。

一度根付いてしまった、他人への不信心と心の傷はそう簡単にぬぐえるものではなかった。新一の言葉は男には届かない。まして、子供の姿のままでは説得力に欠けていた。

「あと1日だ！ あと1日で何もかもがうまくいくはずだった。なのに、お前がっ……！ お前さえいなければ……！！」

「……！」

幸島がまさに引き金を引こうとした瞬間だった。

「コナン！ 隠れろ！」

「おっちゃん！？」

突然飛び出してきた影は小五郎であった。幸島に掴みかかり、必死に銃を奪おうとしている。

「何してる！ 早く隠れろっ！……くそっ」

「……あっ……！！」

声に押された新一は咄嗟に鉄筋の後ろに身を隠そうとした。しかし、不意に走った激痛に、その場に膝をつく。

「コナン！？」

震えるその手は、赤く血に染まっていた。それを見て新一は自嘲

気味に唇の端を吊り上げ、静かに笑う。

(…腹が裂けたか)

「くっ……コナン」

我をなくした男の力は凄まじく強かった。小五郎は、視界の隅で膝をつくコナンを気にするも、なかなか銃を奪うことができない。それどころか、じわじわと相手の力に押されている事に、焦りを覚えた。

(おっちゃん……!)

それを見た新一は、目の前に落ちていた小石を手に取り、おもむろに投げつけた。

そしてついには力尽き、そのまま前のめりに倒れ込んだ。

最後の力だった。

体力も気力も全てを使い果たした。投げた小石は見事に幸島の眉間に当たる。小五郎はその隙を見逃さなかった。

素早く相手の懐に飛び込み、得意の一本背負いを繰り出した。

「幸島！観念しろい！」

雨でびしょびしょにぬかるんではいえ、受け身もとるひまもなく地面に叩きつけられた幸島は、ピクピクと白目をむいて、意識を失った。

小五郎が息を乱していると、遠くでパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。その音に小五郎は我に返る。

「コナン！」

幸島を放り出し、コナンの元へかけ寄った小五郎は、その小さな体を抱えた。

「コナン！おい！しっかりしろ！」

体を揺さぶるが、力なく体重を預けたままピクリとも動かない。

「よせよ……冗談じゃない」

嫌でも不安がつる。小五郎は唇を噛みしめ、恐る恐るコナンの口元へと手のひらをかざした。

微かにあたるその呼吸に、ほっと肩を撫で下ろす。

（……息はある）

そう、まだ息はある。今はまだ。

「毛利さん！」

コナンを抱え、立ち上がったその時だった。遠くでサイレンを鳴らしていたパトカーが次々と現場へと到着した。

あつというまに現場入り口は車で埋め尽くされる。その中の一台から高木刑事が姿を現した。

「毛利さん、コナン君は！」

「…生きているよ、まだな」

「……！」

青ざめ、ぐったりとしている様子に高木は言葉を失った。

「車、借りるぞ」

「…はいっ。病院までは僕が、幸島は他の署員が連行しますから」

「ああ」

「タオル、後ろにありますから使ってください」

「ああ」

後部座席に乗り込み、言われるがままタオルを手にとった。そのタオルでコナンの体を包み込む。

「コナン君っ、しっかりしろよ、今病院に行くからなっ、すぐ近くだから、頑張れコナン君！」

高木は車を走らせながら、しきりに声をかけた。

その声を遠くで聞きながら小五郎は、コナンの体をタオルでこすり、温めた。

（……血、止まらねえな）

1度縫い合わされていた傷口は開き、その糸によってズタズタにされていた。

血が、次から次へと流れ、その身を赤く染めている。

（止まらねえ）

止血をおこなっているはずのその指の間から、真っ赤な液体がとめどなく溢れていく。

息はまだある。

ただ、体温が異常に冷たかった。

どんどんとその体温が失われていくようだった。

小五郎はきつく、その小さな体を抱きしめた。

「頼む、もうこれ以上……」

（奪わないでくれ。この小さな体から、奪わないでくれ）

「……毛利さん」

バックミラー越しに見える小五郎の姿に高木は息をのんだ。

「急いでくれ……御免だ。もうこんなのは……」

額を新一の体に埋めながら、押し殺すようにつぶやく。

「1度で沢山だ……！こんなのは……1度で……」

（沢山だ……！）

エピソード

絶対安静、全治2か月。それが新一の診断だった。

まだ1人では起き上がる事ができないまでも、面会謝絶がとれた頃には、新一の病室もにぎやかになった。小学校のクラスメイト達がほぼ毎日のようにお見舞いに訪れるのだ。

言うまでもなくその大半が、歩美、元太、光彦の3人なのだが。子供達はいつもたわいもない話をし、たわいもないジョークで笑いあっている。

傍から見ればそれは微笑ましい姿だった。

ただ、病室の片隅で見ていた小五郎だけは素直に受け止める事ができなくなっていた。

小五郎は知ってしまった。

コナンの本当の姿を。

前々から、妙に大人びた子供だと感じてはいた。自分は単に生意気な子供だと認識しているにすぎなかった。

だが、今は違う。そんな単純な事ではないのだ。

視界の隅で笑顔を見せているコナンがいる。それを見るたびに小五郎は、あの時、幸島と対峙＜たいじ＞していたコナンの姿が蘇るのだ。

「……どうしたの？おじさん」

「い、いや……」

小五郎の様子に不審を抱いたのか、実に子供らしい声、子供らしい仕草でコナンがこちらの様子を見ていた。首をかしげ、かわいらしい姿のだと思う。

しかし、これは仮面なのだ。

小五郎は思った。本当のコナンは別にいる。それを悟らせまいと、もっとも子供らしく振舞うのだ。

何故そうするのか分からない。ただ、小五郎はその姿が不憫でならなかった。

それはコナンに対して初めて抱いた感情だった。

「…あまり、無理すんなよ、コナン」

「……うん？」

煙草を吸ってくると言って、病室を後にした小五郎の後姿を目で追いながら、新一は軽く眉をひそめた。

その手は、無意識に布団の端をかたく握りしめている。

その様子に気づいた歩美がそっと、その手に触れた。

「……コナン…君？」

「…なんでもないよ、歩美ちゃん」

「…大丈夫？」

「大丈夫…」

新一は心配そうに顔を覗き込む歩美に、口の端だけで笑みを見せた。

我ながら下手な笑みだと、そう思った。

小五郎がコナンに対し、薄々ながらも何かを感じ取った事に新一は気が付いていた。

考えれば、今まで何も思われなかった事の方が不思議だったのだ。

自分は長く小五郎や蘭達と一緒に居すぎた。そう、そろそろ考えなければならぬ時が来たのだ。

新一は思った。

――潮時なのかもしれない

そのころ、喫煙所で煙草をふかし、自らがはいた煙を目で追いながら小五郎は呟いた。

「…どうすっかな…」

色々考えなければならぬ事がある。

それぞれの想いを胸に抱きながら、2人は今日幾度目かの深いため息をついたのだった。

エピローグ（後書き）

「狙われた名探偵」完結です。ちょっと、今回の話は長かったでしょうか。そして、お気づきかと思いますが、しょうこりもなく続きます。

タイトルだけは決まっています。

また、新作がのったら、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7017e/>

狙われた名探偵

2010年10月8日12時56分発行